



じゅしょういん 寿松院

基本データ 住所：常陸太田市田渡町 335

公開時間	駐車場	写真撮影	スタンプ	トイレ	雨天時の 展示物変更
15時30分まで	○	○	○	○	なし

※ 一部の文化財は、普段は公開していません。

寿松院の来歴

寿松院は、無量山^{むりょうざん}寿松院と称する曹洞宗の寺院で、本尊は釈迦牟尼仏です。鎌倉建長寺の末寺で、もとは太田山寿昌寺と称する臨済宗の寺院でした。

太田山寿昌寺は、錦江大和尚が開山、太田城主（佐竹氏7代当主）の佐竹義胤^{よしたね}が開基となって、建治元年（1275）、太田村に創建されました。天文2年（1533）には、佐竹氏10代当主の義篤がこの地に移し、同11年、耕山寺（市内瑞龍町）の華翁聞宅大和尚が中興開山となり、曹洞宗の寺院となっています。

水戸藩2代藩主の徳川光圀は、西山莊隱棲後も何度も寿昌寺を訪れ、様々な援助を行いました。境内には柏としだれ桜を植え、柏は冬になっても葉を落とさず、春になって新しい葉が出てきてから落ちるので、誰もそのようにありたいと願い、また、しだれ桜のように誰に対しても腰を低くしなければならないことを説いたといいます。山内にお手植えされた「しだれ桜」は今でも花を咲かせています。

また、本堂の前にある、立派な松の木を非常に愛したことから、寿松院に改称したと伝わります。

寿松院の文化財

○ 木造十一面観音坐像（1軀） 市指定文化財（平成16年6月1日指定）

一木造りで像高36.9cm、南北朝期（14世紀後半）の作と考えられます。衣部小幅の丸鑿^{まるのみ}が全面にあらわれたつくりで、金銅板製の宝冠や、一面を欠失しているものの頭上の仏面はすべて製作当初のものです。左腕の肘から先は袖口を含み欠失しており、また、台座や光背も後補のものではありますが、肉身部が金泥塗であることや、彫眼など院派系統の作例であることから、平成16年に市指定文化財になりました。徳川光圀による寄進と伝わります。



○ ^{しゃかむにぶつ} ^{もくぞうしゃかによらいざぞう}
釈迦牟尼仏（木造釈迦如来坐像）

像高 67.7 cm、寄木造で室町時代末期の作と考えられる、寿松院の本尊です。肉身部は金泥塗で、衣部には彩色が見られ、目は玉眼です。台座や光背は、江戸時代に製作された後補のものと思われます。

○ ^{だいほんにやきょう} ^{だいほんにやはらみつたきょう}
大般若経（大般波羅蜜多経）

大般若経は三蔵法師玄奘が最晩年に翻訳した、仏典の中でも最大規模を誇る経典で、全 600 巻、500 万字に及びます。仏教の基礎的な教えが書かれている経典で、大乘仏教の空思想に基づいた般若思想を記録したものです。寿松院に伝わる大般若経は、「中野版」とも呼ばれる、中野是心が寛文 10 年（1670）に印刻した刊本経の一つで、全 600 巻を所蔵しています。



○ ^{じゅうろくぜんじんず}
十六善神図（1 幅）

本図は縦 119.9 cm、横 59.8 cm、絹本著色で江戸時代中期から後期の作と考えられます。十六善神とは大般若経を守る護法善神のことで、四天王と十二神将からなります。図の中央には釈迦牟尼仏、向かって右側に智慧をあらわす文殊菩薩、左側に誓願をあらわす普賢菩薩が描かれます。左右に 8 人ずつ描かれる、剣や槍、斧などを持っているのが十六善神です。

○ ^{らいていず}
雷霆図（1 幅）

本図は、縦 53.5 cm、横 101.4 cm、絹本墨画淡彩で、江戸時代中期から後期の作と考えられます。徳川光圀が寄進したもので、絵図の背面には文政 5 年 2 月に補修したことを記した墨書銘があります。この地域では日照りが続くと、村の青年たちが田渡の堰に集まり、本図に水をかけ利趣文を読経し、降雨を祈ったと伝わります。絹地全体に浮上がりが見られるのは、水をかけていた為と思われる。

○ ^{しゃかねはんず}
釈迦涅槃図（1 幅）

本図は、縦 158.7 cm、横 158.7 cm、絹本著色で、江戸時代中期から後期の作と考えられます。涅槃図とは、お釈迦様が入滅する模様を記した「涅槃経」に基づき描かれたものです。釈迦像は金泥で描彩され、また、図の背面には「文政五壬午年二月涅槃像」や、修補に関わった世話人の連名、「耕山寺兼帯住」の墨書銘が見られます。

集中曝涼 アンケートにご協力ください
こちらから回答可能です→
〔各公開場所の受付でも配布しています〕

